



みち 古道が紡ぐ物語



天誅組の足跡をたどって ③山中潰走編

8月26日、高取城の奪取に失敗し、天誅組は、難攻不落の山城、高取城籠城により時間を稼ぎ各地の尊王攘夷派の決起を待つという戦略を放棄せざるを得なくなりました。また、幕府、さらに朝廷からも追討令が発せられ、近隣の各藩の兵が鎮圧に動き、吉野の山岳地帯の中に包囲されます。やがて、中心兵力の十津川勢が、決起は朝廷の意志ではないことを知り戦線を離脱、また、主将中山卿と参謀の統率力欠如もあって天誅組は分裂し、十津川街道、東熊野街道沿いの山中を迷走します。

揺れる方針で追討軍の包囲を許す

高取城攻めに失敗し、8月27日、吉村虎太郎らが五條に帰陣してみると、水郡善之祐^{にぎりぜん の すけ}ら河内勢が残るだけで、中山卿らは天辻峠本陣に戻っていた。

「八月十八日の政変」以降、天誅組は皇軍御先鋒の大義名分を無くし、望みの綱、高取城攻略にも失敗し、後は退路を切り開くしか無かった。しかし、中山卿らの本隊と、吉村、水郡ら前線との間の指示系統の混乱はこの後の迷走を呼ぶ。

中山卿の率いる本隊は、熊野川（十津川）を下り、新宮から海路での脱出を図る方針に転換し、一方、吉村や水郡は、あくまで追討軍迎撃、天辻峠死守を主張。方針は分裂した。

本隊はさらに十津川郷を武蔵村へと南下したが、すでに、新宮藩が熊野川沿いを抑えていた。その間、天辻峠の吉村らは、五條方面から進出する紀州藩兵を撃退。この方面の突破を本隊に進言した。

本隊もこれを受け入れ、天辻峠へ戻ったのが9月6日である。迅速で統一的な行動があれば、突破の可能性もあったが、この10日ほどの迷走は、緩慢な追討軍に準備の時間を与えてしまった。

白銀岳の攻防と下市の大火

翌7日には五條方面に北上し、白銀岳（銀峰山）に本陣を移した。ここは、五條から十津川方面に至る十津川街道（西熊野街道）と、下市（吉野郡下市町）から大峯山に至る丹生街道の中間に位置し、現在の国道168号線西吉野町城戸と309号線下市を結ぶ県道の半ばで、大和盆地から攻め入る追討軍の主要2経路をにらむ要衝である。



白銀岳の本陣が置かれた波宝神社



白銀岳からの五條方面の眺望

山頂には、本陣が置かれた波宝神社^{はほうじんじゅ}とその神宮寺が残るが、明治期には高等小学校が置かれた。今は人里離れた無人の神社だが、修験道の開祖^{えんの}役行者^{ぎやうじゅ}ゆかりの古社で、吉野の信仰の道は奥深い。

9月8日、彦根藩兵2千が下市から白銀岳を目指して進軍。途中河内勢が防戦したが、多勢を支えきれず後退。同じ頃、下市の南、丹生街道の広橋峠にも郡山藩兵2千が進軍。現在は見事な梅林が広がる峠だが、その頂上の法泉寺を陣として丹生川上神社下社神官の橋本若狭らが応戦した。

激戦の後、彦根藩兵は下市まで引き上げたが、10日未明、橋本らは下市の彦根陣を急襲。物資を奪い、陣と民家に火をかけた。これが「下市の大火」で、5百戸近い民家が焼失したという。

物資を奪い白銀岳本陣へ戻ったものの、今度は、五條側の麓である大日川に津藩兵が侵攻し、大乱戦になった。追討軍は、総攻撃に備えて陣容を整えるために一端後退を見せたが、ここで、天誅組は五條突破の難しさを知ることとなる。



「笹の滝」に至る
林道脇の伴林光平
の歌碑（十津川村
滝川）

林泉寺（上北山村
白川）。ダム建設
に伴い建替えられ
たものである。



十津川勢と河内勢の離脱

大日川の戦いで、本陣は再び天辻峠に後退した。翌11日には、河内勢が天誅組離脱を決意している。常に戦闘の前面に配されながら、度々前線に置き去りにあい、同志として扱われていない不満もあった。そして、14日には紀州、津藩兵3千が押し寄せ、ついに天辻峠の本陣が陥落した。

この頃、朝廷も天誅組追討の令旨を下したが、京都で御所警護についていた上平主税かみだいらいちからにより十津川郷にも知らされた。ひたすら尊王の意志で動いている十津川郷では、離脱を決定、天誅組に郷外退去を要求する。15日、上野地にいた中山卿は寄る辺を失い、遂に天誅組の解散を命じた。

十津川郷民を村々から強引に駆り出し、昼夜をかけて馳せ参じさせたにもかかわらず、ろくな食事と休息も与えず、すぐさま高取城攻めに駆り立てる。人を人とも思わない横暴である。一体、彼らは、十津川勢を同志として見ていたのであろうか。吉村・水郡勢らと同様、十津川勢は、中山卿本隊の独断には翻弄され続けてきた。

十津川勢離脱に当たり、中山卿側の藤本鉄石は「十津川のはらわた黒き鮎の子は 落ちていかなる瀬にや立つらむ」と詠み捨てた。何をかいわんや。ならば、天誅組は、尊王に凝り固まり、勝手な論理を振りかざす突出集団ではないか。

北山郷から北へ退路を求める

天誅組解散に伴い、参謀格の伴林光平、平岡鳩平らは、間道探索のため風屋を東進、日本百名滝の一つ「笹の滝」を経て、嫁越峠を越えて北山郷前鬼村（現下北山村）から東熊野街道（現国道169号線沿い）へと抜けた。が、この報告は本隊には届かず、中山卿らは、後続部隊と合流後、小原（現在の十津川村役場あたり）まで南下。なお海路での脱出を図ったがかなわず、今の国道425号線沿いを東進、笠捨山を越え北山郷へと向かった。

一行は難渋を極め、傷病者は増加し、松本奎堂はとうとう両眼を失明している。そして、浦向村（現下北山村）を経て東熊野街道に出たが、ここも紀州・熊野への道は塞がれている。一行は、あきらめて北へ向かうこととし、21日に白川村（上北山村）の林泉寺に着陣した。

ここでは、上北郷の郷民が難を避けるため山中に逃げ込んだため人足が足りず、物資とともに寺を焼いたという。そして、多くの傷病者をかかえ、難渋しながらさらに北上。東熊野街道最大の難所、伯母峰峠を越え、現在の川上村内に入った。

（次号に続く）

（山城 満）

天誅組関連時系列表

とき	主な出来事・天誅組本隊の足取り
9月6日	8月27日以降十津川郷に南下していた本隊が天辻峠に戻る 吉村勢・河内勢ら前線部隊の足取り
9月7日	本隊、大日川で津藩が退却した間に白銀岳の頂上に移陣 河内勢・大日川砦守備隊が津藩兵と激戦
9月8日	彦根藩兵、下市から白銀岳方面へ進軍。河内勢が防戦 郡山藩兵、広橋峠へ進軍。橋本若狭隊が防戦
9月10日	彦根兵、大日川に來襲。本隊と戦闘 未明、橋本隊が下市焼き討ち。彦根・津藩行動不能化 河内勢、五條へ引き上げる彦根兵を追撃
9月11日	本隊、天辻峠に本陣を移す 河内勢、またも置き去りにされ離脱を決定
9月14日	紀州・津藩の大軍により天辻峠本陣陥落。十津川勢も離脱
9月15日	本隊、上野地に本陣を移す。進退窮まり、天誅組解散を宣言 吉村ら、殿軍となり長殿付近で防戦。後、本隊合流
9月17日	伴林光平ら先行隊、風屋から嫁越峠を越え北山郷へ
9月20日	中山卿らの本隊、大峰山系を越え北山郷へ到着
9月21日	中山卿ら本隊、上北山白川村に至る